

ロバート・バートン  
『憂鬱の解剖』  
第1部 第2章 第3節 第1-10項

岡村 眞紀子  
川島 伸博 訳

第1項

情念と心の乱れ、これらが憂鬱症を惹き起こす原理。

アレクサンドロス大王から話が一番上手いのは誰かと詰問されたインドの裸行者が、皆それぞれに巧く話す、と答えて言い抜けたという逸話がプルタルコスにある。これと同じように、憂鬱症の原因で最大なものは何かと問われたら、どれもそれぞれに重大と答えて逃げることもできようが、最大の原因は情念であると答えることもできる。これは憂鬱症を惹き起こすもっともよくある原因であり、ピッコロミーニ曰く「心の乱れという雷鳴」、我々の身体というこの小宇宙に激しく急速な変化をもたらし、多くの場合、その小宇宙のすぐれた調和を転覆してしまう。というのも、身体が心に作用するように、心もまた身体に作用するからだ。身体は悪質な体液によって精気を乱し、脳に粗雑な煙霧を送り込む。その結果、魂を攪乱し、その機能をすべておかしくしてしまう。

——昨日の過ちに

悩む身体は、すぐに魂をも苛む、

恐怖や悲しみなどで。これらは、この病気によくみられる症状である。これと同じように他方では、心もまた身体に大きく作用するのであり、情念と心の乱れによって、身体は不可思議な変化を被る。たとえば憂鬱症や絶望に陥ったり、激しい苦痛を伴う病気に罹ったり、死に至ることさえある。プラトンが『カルミデス』で述べる「身体の病はすべて魂から生じる」というのが本場で、プルタルコスの著作で、デモクリトスが説くように、この点で「身体が魂を訴えたとしたら」、きっと魂は敗訴し有罪となるだろう。魂は身体に対して権限をもち、あたかも鍛冶屋が金槌を使うかのごとく、身体を道具として使うことができる。にもかかわらず、その魂が怠け、監督不行

き届きで不都合が生じたのであり、キブリアヌス曰く、身体の欠陥と病気はすべて、心のせいなのである。ピロストラトゥスに至っては、「**身体が腐敗する原因は魂以外にない**」とまで言う。ヴィヴェスによると、身体の激しい攪乱は魂の「無知」と「無分別」から生じる。また哲学者たちはみな、身体の病の原因は、魂の怠惰、つまり、理性の力で身体をうまく管理するのを怠った魂にあるとする。リップスとピッコロミーニが書いているように、ストア派の見解は、賢人であれば「**無感情**」で、あらゆる情念と心の乱れから自由であるべきだ、という点で一致している。セネカがカトーについて、ギリシア人がソクラテス、ハンス・ベームがアフリカのある種族について書いているように、彼らには情念がなく、あるいは愚鈍というべきか、たとえ剣で斬りつけられたとしても、ただ振り返るだけであろう。ラクタンティウス（『神学綱要』2）は「賢人には恐怖がない」と言う。賢人にはあらゆる情念がないと言う者もいるし、欠落しているのは激しい情念だけだと主張する者もいる。だが、学者諸氏には好き勝手に論じさせておこう。論文に見解を発表するなり、反論するなり、どちらでも構わない。ただ、我々としては共通の経験から、レメンスの見解「いかなる人も心の乱れから自由になることはない」は、正しいと言えるだろう。もし自由なのだとしたら、その人はきっと神さまか、木偶の坊かのどちらかである。ペレツイウス曰く、「**情念は我々と同時に生まれ育つ。我々は両親からこの悪しき遺産を引き継ぐのである**」。情念はアダムから広まり、カインは憂鬱症だった、とアウグスティヌスは言う。だとしたら、そうでない者などいるはずがない。確かに、すぐれた規律、教育、哲学、神学が、こういった情念を和らげ、抑える場合もある。それは否定しない。しかし、多くの場合、情念は暴君として振る舞い、あまりに激しいので、「**激流のごとく**」目の前にあるものを「**なぎ倒し**」、岸から溢れ、「**畑を荒らし、穀物に被害をもたらし**」、理性と悟性を圧倒し、身体の調和を乱してしまう。「**御者は馬に操られ、馬は手綱を嫌う**」。アウグスティヌス曰く、このようになってしまった人は、「賢人の目には、逆立ちしている人同然である」。「**体液と心の乱れとでは、どちらがより激しい病を惹き起こすだろう**」と疑う向きもある。だが、この点については我らが救世主の言葉が雄弁だ。「心ははやっても、肉体は弱い」（『マタイ』26. 41）のであり、抗しようがない。またピロ・ユダエウスの言葉も参考になる。「心の乱れはしばしば身体を害し、憂鬱症をもっとも頻繁に惹き起こす原因であり、健康の籬をはずしてしまう」。ヴィヴェスは情念を「海上の風」に喩える。「強風のように船を揺らすだけのものもあれば、嵐のように船を転覆してしまうものもある」。軽くて安易で頻度の少ない情念ならば、我々の思考に害を与えること少なく、したがって軽んじられる。ただし、これが繰り返されると、アウグスティヌス曰く、「**雨垂れが石を穿つように、心の乱れは心を貫いてしまう**」。そしてヴィヴェスが言うように、「**しまいには憂鬱症を常態化し**」、我々の魂を支配するようになり、当然、病気と呼ばれるようになる。

こういった情念がこの病を惹き起こす原理について詳細に論じている本には、アグリッパ（『隠秘哲学』1. 63）、カルダーノ（『精妙さについて』14）、レメンス（『自然の神秘』1. 12, 16）、スアレス（『形而上学討論集』18. 1. 25）、ティモシー・ブライト（『憂鬱症論』12章）、イエズス会士

ライトの心の情念に関する書物などがある。ゆえに、ここでは簡単に記すにとどめる。外的感覚と記憶力を通して、認識されるべき対象が我々の想像力に至り、脳の主要部にとどまる。想像力がその対象を間違えて認識したり、拡大したりすると、すぐさま、感情の座である心臓へとそれを伝える。脳から心臓へは、純粹精気も未知の通路を通して大量に流れ込み、もたらされる対象の良し悪しが示される。すると心臓は、この対象を起訴し、避けようとする。そしてその助力とするため他の体液を引き込むのであるが、喜んでいるときは、さらに純粹な精気、悲しいときは、黒胆汁、怒っているときは黄胆汁がどっと流れ込む。そして想像力が敏感で、集中しやすく、激しい場合、大量の純粹精気が心臓と脳の間で行き来することとなり、深く影響を残し、乱れも激しくなる。この際、同様に身体の体液も増えるので、気質自体もよくなったり悪くなったりし、情念も持続するようになり、また激しくなる。よってこの種の苦しみの発端である第一段階は「想像力の破損」であり、心臓に虚偽の情報を伝えることで、精気と体液の調和を乱し、変化させ、混乱させる。これが原因となって、かくのごとく精気と体液が混乱するので、調合が阻害され、身体の主要部も大いに害を被る、とは憂鬱症のユダヤ人の件でダ・モンテに相談された医師ナバラの説である。このように精気が混乱すると、必ずや滋養が損なわれ、悪質な体液が増え、黒胆汁と一緒に未熟なものと濃い精気が作られることになる。身体の他の部位も、激しい情念によって精気が主要部へと流出するので、機能不全に陥り、感覚がおかしくなり、きちんと動かなくなる。かくして我々は物を目にしても見えず、耳にしても聞こえない。情念がなければ、精気は我々に良い影響を与えるのだが。ここで、ヴィラ・ノーヴァのアルナルドゥスの言葉を引いて結論としたい。「想像力は強大で、憂鬱症の原因の多くは、想像力、そして、それによる身体の不調に帰せられる」。この想像力については、この病気を生じる大きな原因であり、また、それ自体、非常に強力なものであるので、ここで少し脱線して、その力について論じ、想像力が身体を変質させる原理について語ったとしても不適切ではないと思う。この手の脱線を、場違いでくだらないものと嫌う向きもあるが、私はベロアルドと同意見である。「こういった脱線は疲れた読者を大いに喜ばせ、元気付け、まるで食欲不振を治すソースのようなものだ。それゆえ、私は進んで脱線を行うのである」。

## 第2項 想像力の力。

想像力の何たるかについては、「魂の解剖についての脱線」で十分に説明したので、ここでは想像力のもつ驚異的な影響と力について指摘したい。想像力はあらゆる人において顕著であるが、特に憂鬱症の人たちの場合は凄まじく、見た物の像を長くとどめるあまり、熱烈に瞑想しつづけることによってその像を勘違いしたり、拡大したりし、終いには実質的な影響を被るに至り、憂鬱症などさまざまな病気に罹ることもある。そもそも我々の想像力は理性に従属する働きであり、理性によって支配されるべきものである。しかし、体内の不調や体外の変調、体内器官の欠陥に

よって、不適切となり支障をきたし、もしくは汚染される人は多く、彼らの想像力も同様に不適切となり、支障をきたしたり、損傷したりする。このことは睡眠中の人を見れば確かめることができる。人は就寝中、想像力を乱す体液、もしくは煙霧が生じるので、馬鹿げたことや奇怪なことを想像することが多い。また「夢魔」や所謂「馬乗り魔女」に苦しむ人たちの場合も同様である。この人たちは仰向けに寝ると、馬乗りになって重くのしかかってくる老婆を想像し、そのために息が出来ず窒息しそうになる。彼らには悪しき体液が生じている以外どこにも悪いところはないのだが、その体液が想像力を妨げているのである。これに加えて夢遊病、夜に眠ったまま歩きまわって不思議なことをする人の場合も同様である。煙霧が想像力に作用すると、想像力は欲求に作用、するとこの欲求は動物精気に作用するので、あたかも起きているかのように、身体が歩き出すのである。フラカストロ（『思惟について』3巻）は法悦の原因をすべて想像力の力に帰する。たとえば一日中恍惚状態で過ごす人、ケルススが伝えるあの司祭、自分の意の向くままに意識を切り離し、生氣も感覚もなく死人のようになることができたという人などがその例である。カルダーノは、自分自身これと同じようなことができる、しかも意のままにできると自慢する。こういった人たちは、多くの場合、意識が戻ると、天国や地獄の不思議なこと、自分たちが見てきた幻について語る。マシュー・パリスに出てくる、聖パトリックの煉獄へ行ったというオウエン卿、同じ作家に出てくるイーヴシャムの僧侶などがその例である。既に述べたように、ヴァイエル（3巻「魔女」11）やルチリオ・ヴァニーニ（対話集）などは、ビードやグレゴリウスに出てくるお馴染みの亡霊や、聖ブリギッドによる黙示を、魔女の行列、舞踏、天翔け、変身、秘術などの話と同列に扱い、想像力の力と悪魔が見せる幻影だと断じる。同種の影響は眠っていない人にも見ることができる。どうして彼らは怪物や怪奇、黄金色の山や空中楼阁といったものを作り出すのだろうか。私は画家や工匠や数学者のせいであると思うが、こういった邪悪なものをすべて想像力の誤解や腐敗、怒りや復讐心、欲望や野望、貪欲のせいだとする者もいる。このような状態に陥ると、正しく善良なものよりも、誤まてるものを好み、間違った見せかけと思込みで魂が騙されるというのだ。ベルナル・ペノは邪教と迷信とはこの泉から生じるとする。間違っただけで想像すると、そのように信じてしまい、そのように考えると、そうに違いない、そうであろうと、常識に反して思うようになる。しかし、特に激しいのは、情念や感情にとられる場合であり、奇妙で明白な影響が出る。暗闇のなかで脅える人は何を見ても、お化けや悪魔や魔女や小鬼など奇妙なものを頭に思い浮かべてしまう。ラーヴァータは幽霊や同種の亡霊を見てしまう最大の原因は恐怖にあるとする。ヴァイエルの言うように恐怖はあらゆる感情にまさって、強烈な想像力を生み出すが、愛や悲しみや喜びも同様である。カンナエの戦いから息子が帰還する幻を見た母親などのように、突然死んでしまうものもいる。父祖ヤコブは、斑の杖を羊の前に置き、想像力の力で、斑模様の羊を見たと言われる。ヘリオドロスに出てくるエチオピア女王ベルシーナは、ペルセウスとアンドロメダの絵を見ることで、ムーア人ではなく、金髪で白人の子を産んだという。おそらくこれを真似したのであろう、ギリシアのある醜男は、自分も妻も容貌が醜いものだから、美しい子をつくらうと思い、有り金をはたいて綺麗な絵を何枚も寝室に飾ったとい

う。「妻が何度もそれを目にするので、その絵のような美しい子を身ごもり出産するように」と思っている。またペイルの話を知るならば、法王ニコラウス三世の側室の中には、熊を見たのが原因で、怪物を生み落とした者がいたとのことである。レメンス曰く「受胎の際に女性が、相手の男性とは別の男性のこと——その場にいなくても、いなくても——を考えると、その男性に似た子が生まれる」。妊婦は隠したが、この種の驚異的な例は多い。彼女たちは誤った想像力の力によって、ほくろやいぼや傷のある子、兎唇の子、怪物を生み出してしまふ。「**妊婦は心に思い描くイメージをその胎児に刻印するのだ**」。それゆえルイス・ヴィヴェスは全集2巻「キリスト教徒の女性」で、妊婦に対し特別な注意を与える。「馬鹿げたことを思い浮かべたり、考えたりしてはいけない。見るだに聞くだに恐ろしいもの、あるいは汚らわしい光景はなんとしても避けねばならない」と。想像力によって示されるものに対し、笑ったり、泣いたり、ため息をついたり、呻いたり、顔を赤らめたり、震えたり、発汗する者もある。アヴィケンナは、自分の思い通りに麻痺状態に陥ることのできる人について書いている。また鳥や獣の鳴き声を真似することができる者もあるが、その声は本物と区別がつかない。キリストの傷痕と類似するダゴベルトと聖フランシスの傷痕（少なくともその手の類）についても、アグリッパは想像力の力によって起こったものだと考えている。狼に変身したり、男から女、そして女から男へと変身するという人々も、大概は想像力の産物であると信じられている。人の姿からロバや犬などに姿を変えると人々も同様である。ヴァイエルは有名な変身譚をすべて想像力に帰す。恐水病に罹った人がいつも水面に犬の姿を見るらしいこと、憂鬱症の人や病人が、多くの幻想と幻影を見たり、自分たちが王や領主、鶏、熊、猿、梟であるといった馬鹿げた幻影を見てしまうこと、「症例」の章で詳述するが）憂鬱症患者が重かったり、軽かったり、透明であったり、大きかったり、小さかったり、感覚がなかったり、死んでいたりすることも、他ならず、腐敗して、誤てる、制御不能な想像力のせいである。想像力は、病人や憂鬱症の人だけでなく、健全な人にも、さらに激しく作用することがある。想像力によって突然病気になったり、気質が一瞬のうちに変化したりする。あるいはデ・ヴァレスが示しているように、強い想念や不安によって、病気が治ってしまう場合もある。いずれの場合でも、想像力は実質的な変化を生み出すのである。他の人が震え、眩暈を起こし、恐ろしい病気に罹っているところを見てしまうと、この種の不安と恐怖は強烈なので、見た人も同じ病気に罹ってしまう。あるいはまた、預言者や賢人や占い師によって、病気に罹ると言われると、それについて深刻に思い悩むので、すぐさまその病気に罹ってしまう。イエズス会士リッチの伝えるところによれば、中国ではよく知られたことだという。「ある日に病気に罹るとの予言をされたとする。するとその日が来ると、間違いなく病気に罹り、あまりの苦しみに死んでしまうことさえある」と。『蒙昧なる開業医についての報告』8章で医者コッタが、想像力のできることに関連する不思議な話を二つ記している。1607年のこと、医者診察を受けにきたノーサンブシャの教区会司祭の妻の話である。その医者は座骨神経痛に罹っていると彼女に診断を下すも、それは彼の誤診で、彼女はそんな病気には罹っていなかった。しかし、彼女が帰宅したその晩、医者言葉のせいで座骨神経痛の痛烈な発作に襲われたという。もう一つの話も、



ある妻に関するものである。彼女も同様に、医者にそう宣告されたからという理由だけで、瘵癩に罹り、苦しんでいたという。また想像力の力によって死がもたらされることもある。私の聞いた話では、疫病に罹っていると思われていた（実際には違った）人と偶然一緒になってしまい、突然、死んでしまった人がいるとのことである。また想像によって疫病に罹った人もいたという。仲間が流血するのを見て失神する人もいる。アリストテレスを典拠にカルダーノが言うように、絞首刑にされる人を見て倒れ死んだ人もいる（これは恐ろしい光景を目にした女性によく起こることである）。ルイス・ヴィヴェスの伝えるところによれば、フランスのあるユダヤ人は、暗闇の中、それと気づかずに、ある危険な通路を偶然にも無事に渡ることができたという。しかし、翌日、それが川に渡してある板っきれで、自分がいかに危険な状態にあったのかを知ると、死んでしまったという。こういった話が本当だとは信じず、それを聞いてもみなで笑ったり、馬鹿にしたりする人も多いただろう。しかし、そういった人たちには考えてもらいたい。ピエトロ・ピエロが示すように、人は高いところにかけて板を歩くように言われると眩暈を起こす。その板が地面に置かれていたならば、簡単に渡れるにも拘らず。アグリッパの言うように、「強靱な心をもった人でも、多くの場合、高いところから見下ろすだけで、震えだし、眩暈を起こして、気分が悪くなってしまう。これを想像力のなせる業と言わずして何と言おうか」。想像力によって苦しめられる人がいるのと同様に、想像力の力だけで、また、良いことを思い浮かべるだけで、簡単に病気が治ってしまう人もいる。歯痛や痛風や癲癇や狂犬病など多くの病気が呪文や言葉や絵図や魔除によって癒され、また生傷が現在よく使われる武器軟膏によって磁気力で治されるというのは、よく知られたことである。これについてはクロッリウスとゲッケルが最近出版された本で弁護しているが、リバウは正しくも論攷で頑強に反対しているし、異を唱えるものは多い。そのような魔除や治療法になら効力がなく、強い思い込みと信念があるだけであることは誰もが知っているが、ポンポナツィが主張するように、そこから「体液と精気と血液に動きが生じ、疾患部から病気の原因が取り除かれる」。同じことが、魔法や迷信療法、大道薬売りや魔法使いがすることについても言える。ヴァイエルが魔除や呪文等について言うように「たちの悪い猜疑心によって傷つく人も多いが、同じ手段によって病気が治る人が多いことを我々は経験から知っている」。藪医者や低能な外科医はしばしば、正当な医者よりも奇妙な治療を行う。ナイマンはその理由として、患者が医者を信頼している点を挙げているが、これをアヴィケンナは「技術や処方や治療法などよりも先にくるべきもの」としている。カルダーノ曰く、信じるか信じないかで医者はよくなったり、悪くなったりする。ヒポクラテスによれば、多くの患者が信頼する医者が最良の治療を行う。我々の想像力はこのようにさまざまな形で我々の身体に影響し、変化させ、歪曲し、横柄に命令を与えるので、身体はまるで「プロテウスやカメレオンのように、あらゆる形をとることができる」。またフィチーノが付記するように、「想像力の力は凄まじく、自分自身だけでなく、他人にも影響を与えることがある」。そうでないとしたら、ある人が目をしばたいていると他の人も同じようにするのはなぜか。ある人があくびをすると、他の人もあくびをするのはなぜか。ある人が小便をすると、たいていの場合、他の人もしたくなるのはなぜなのか。

木皿をこする音、やすりをこする音を聞くと気分が悪くなるのはなぜか。殺人者が目の前に連れてこられると、死後、数週間が経過しているにも拘わらず、死体から血が流れるのはなぜか。魔女や老婆が子どもたちを魅了し、魅惑するのはなぜか。これはヴァイエル、パラケルスス、カルダーノ、ミザルドゥス、ヴェルリオーラ、ルチリオ・ヴァニーニ、カンパネッラなど多くの哲学者たちが考えているように、強烈な想像力が、ほかの人の精気に作用し、変化させるからである。いや、これだけではない。魔女たちはこの手段を使って、アヴィケンナが『魂について』(4.4)で考えるように、遠く離れた人に対しても病気などさまざまな症状を惹き起こしたり、治療することができる。そしてさらに物体の場所を移動させたり、雷鳴や嵐を生じさせることもできる。この見解については、アルキンドゥスとパラケルススなどが同意している。以上のことから、強烈な想念や想像力については次のように結論できるだろう。想像力とは**導きの星**、この我々の身体という船の舵であり、本来は理性が舵取りをしなければならないのだが、しばしば空想に圧倒され、制御不能となり、船全体が支配され、転覆してしまう。この点に関する詳細が知りたければ以下の文献を参照すべし。ヴァイエル3巻「魔女」(8,9,10)、フランシスコ・デ・ヴァレス『医学哲学論争』(5.6)、マルチェッロ・ドナーティ『驚異の医学史』(2.1)、リーヴェン・レメンス『自然の隠れた驚異』(1.12)、カルダーノ『有為転変』(18)、コーネリアス・アグリッパ『神秘哲学』(64,65)、カメラリウス『象徴・エンブレム三百』(54)、ナイマン『想像力論』、デュ・ローラン、とりわけ、アントワープの有名な医者で『人間の想像力について』三巻の本を書いているフェイアン。このように私は脱線をしてきたが、それはこの想像力が情念の**道具**であり、これによって情念が作用し、驚くべき影響を与えることが多々あるからである。つまり、想像力が向けられ、伝えられて、情念を支配する体液が増えるにつれ、心が乱れ、深刻な結果を惹き起こすのである。

### 第3項 心の乱れの分類。

想像力に支障をきたす心の乱れと情念は、感覚と理性の領域の間に位置しているが、身体感覚器官にどっぷりつかっているため、理性よりは感覚に従う。これらは通例、「気概的」傾向と「欲望的」傾向とに二分される。トマス主義者たちは、これらをさらに十一種類、すなわち「欲望」に関する六種類、「気概」に関する五種類に下位区分する。アリストテレスは「快樂」と「苦痛」、プラトンは「愛」と「憎しみ」、ヴィヴェスは「善」と「悪」に分ける。善の場合、現前すると、我々は無条件に愛し、「喜び」となり、未然だと、それを希望し、「欲望」となる。これに対し悪の場合、我々は無条件にこれを憎み、現前すると、「悲しみ」となり、未然だと、「恐れ」となる。これら四つの情念を喩えて、ベルナルは「この世界で我々を連れ回す馬車の四輪」と言う。他の情念はすべてこれら四つに付随するものである。これら「喜び」、「欲望」、「悲しみ」、「恐れ」に「愛」と「憎しみ」を加えて六つを主要情念とする人もいるが、いずれにしても「怒り」、「妬

み]、「競争心」、「高慢」、「嫉み」、「不安」、「慈しみ」、「恥辱」、「不満」、「絶望」、「野心」、「貪欲」といった他の情念は、これら主要情念に還元することができる。そしてこういった情念が激しくなると、精神を消耗し、とりわけ憂鬱症の原因となる。確かに我々の中には、分別があり、自分を律し、こういった過度の感情を宗教、あるいは哲学、または温厚や忍耐といった神の戒めによって抑えることができる人もまれにいる。しかし大半の人は、規律を持たず、無分別で無知な状態にあり、感覚に導かれるままになっていて、荒れ狂う傾向を抑えるどころか塩を送り、手綱を放して拍車をかける。生まれつき悪いものが、慣らい（技芸、修練、習慣、教育）と邪な意志によってさらに悪くなり、大抵の人は手綱を解かれた感情の赴くままに付き従い、習慣と意志によってさらにつき進み、最後には理性を失ってしまう。メランヒトンはこのことを「**頑迷なる意志**」と呼び、それが「**悪をなす**」と言う。この頑迷な意志は判断力を狂わせるので、判断力は、すべきことがわかっていても、それをしようとしない。「**欲望の奴隷**」と化した人々は、色欲によって目隠しをされ、野心に目が眩み、心労という迷宮の中へと身を投じるのである。「神の手にあるものを求める人々は、彼らの心を絶えず弱くする心労や心の乱れを抑えることができさえすれば、それを手に入れることができる。」しかし、結局は恐れ、悲しみ、恥辱、復讐心、憎しみ、悪意といった激しい感情に身をまかせてしまい、自分の犬に襲われたアクタイオンのように引き裂かれ、魂を苛むこととなる。

#### 第4項

#### 悲しみ、憂鬱症の原因。

人の魂を激しく苛み、この病気を惹き起こす情念について、これから順に略述していくが、気概的情念の筆頭の座を占めるのは「悲しみ」である。悲しみは憂鬱症とは切り離すことのできない伴侶、「母娘、縮図、症状、主要因」である。ヒポクラテスによると、悲しみは憂鬱症の原因であり、かつ症状である（症状については後述）。よって両者は互いの親となり、円舞を踊る。この情念が憂鬱症の原因であることについては、通説になっている。「**多くの人にとって、悲しみは狂気の、そして、さまざまな不治の病の原因であった**」と、アポロニウスにプルタルコスは言っている。悲しみは狂気の原因であり、その他、多くの病気の原因であり、この病気に関しては唯一因である、とレメンズは言い、『ラーゼス大全』(1.9)、グァイネリオ(15.5)も同様である。フェリクス・プラタが認めるように、いちど悲しみが根を下ろすと、結末は絶望である。またケベースの表にあるように、両者が対として結び付けられるのは当然である。オリンピア宛第17書簡でクリストモスは悲しみを「魂に加えられる残酷な拷問、不可解極まりない悲痛、身体と魂を餌として心臓にまで齧りつく毒虫、やすむところを知らぬ死刑執行人、永久に続く夜、漆黒の闇、旋風、嵐、如何なる火よりも熱い不可視の瘡、止むことなき戦い」と形容し、「悲しみが人々を苛むさまはいかなる暴君よりもひどく、いかなる拷問、つるし刑、身体刑も悲しみほど酷くはない」と言う。悲しみは、詩人たちがプロメテウスの心臓をついばましめた問答無用の



驚であり、「心に加えられる重圧ほど重苦しいものはない」（『集会の書』25. 15. 16）。「心の乱れはどれも悲惨なものだが、悲しみは残虐な責苦であり」、他を圧倒する情念である。古代ローマで専制者が現れるとその下にいる長官たちがみな沈黙したように、悲しみが現れると他の情念は雲散霧消する。ソロモン曰く「悲しみは骨を干上がらせる」（『箴言』17）。悲しみにとらわれた者の目は虚ろとなり、その顔は青白く痩せこけて皺が刻まれ、生氣のない表情をする。また額には深い溝が刻まれ、頬にも皺ができて、身体も干上がり、気質も異常をきたす。まさに我らがイングランドのオウィディウスたるドレイトンの詩で、追放されて悲嘆に暮れる公爵夫人、かのエレノアが高貴なる夫グロスター公爵ハンフリーに寄せる嘆きのように。

かつてあなたは私の瞳をご覧になり、その甘美で  
 澆刺とした姿をととも喜び、楽しんでくださいました。  
 でも、悲しみが私の美しさを台無しにしまいました。  
 今ご覧になっても、あなたのエレノアだとはわからないでしょう。  
 おぞましいゴルゴンようになってしまったこの顔では。

「悲しみは体液の調合を妨げ、心臓を冷やし、食欲と色艶と睡眠を奪い去り、血液を濃くし」（フェルネル 1. 18「病の原因」）、「精気を汚し」（ル・ボワ）、生得の熱を破壊し、身体と心のあるべき状態を乱す。そして悲しみに暮れる人は人生に倦み、その魂の苦しみのために泣き声を上げ、わめき、うなる。ダヴィデは何度も告白している。「心の乱れのために私は呻き叫んだ」（『詩篇』38. 8）。「私の魂は、悲しみのあまり挫けてしまう」（119. 28）。「私はまるで煙に包まれた瓶のようだ」（119. 83）。シリア王アンティオコスには眠れないと託ち、悲しみのために心が挫けると嘆いていた。悲しみの人たるキリスト自身も、悲しみを憂うあまり、血の汗を流した（『マルコ』14）。キリストの魂は死に至るほど悲しみのためにつぶされ、その悲しみは誰の悲しみにもまして激しいものだった。クラト（21. 2）は悲しみが原因で激しく憂鬱となった人を、ダ・モンテ（30）は「これ以外には原因が考えられない」高貴な夫人を例に挙げる。ヒルデスハイムが言及する I・S・D 氏はひどい憂鬱症に苦しんでいた患者を完全に治し、何年も良好な状態が続いたのだが、「ちょっと悲しいことがあっただけで、その患者はもとの状態に逆戻り、以前同様に苦しんだ」という。悲しみがいかに憂鬱症や絶望を惹き起こし、時には死に至らしめるかを示す例も多い。「心の重荷から死は来る」（『集会の書』38. 18）。「この世の悲しみが死を惹き起こす」（『コリント 2』7. 10）。「我が命は重荷によって、我が人生は嘆きによって潰え去る」（『詩篇』31. 10）。ヘカベが犬に、ニオベが石になったと言われるが、それはなぜか。悲しみのために分別を失い、愚かになってしまったからに他ならない。皇帝セウェルスは悲しみのために死んだ。同様に多くの人々が死んだ。

それほどまでに彼の悲しみは激しく、狂おしい。

メラニトンはこの理由を次のように説明する。「心臓付近に大量の黒胆汁が集まり、これによって良好な精気が掻き消され、そうでなくとも鈍くなる。このようにして悲しみは心臓を攻撃し、激しい痛みで震いおこし、やつれさせるのだ。すると脾臓から黒胆汁がさらに放出され、それが肋骨の下の左側に拡散し、例の危険な下肋骨痙攣が起こる。これが悲しみに苦しむ人たちの体内で生じている現象である」。

## 第5項 原因としての恐れ。

悲しみの従姉妹とされる恐れは、むしろその姉妹、親友、伴侶であり、この病気を惹き起こすのに、補助的役割、ときには主要な役割を果たす。悲しみと同様、恐れはこの病気の原因であると同時に症状となる。ウェルギリウスがハルピイアの描写に使った言葉を使えば、恐れと悲しみの特質をうまく表現できるだろう。

これほど悲しい怪物、これほど恐ろしい神々の呪いと怒りが、  
スティクス川から出て来たことはない。

この恐れという怪鳥は、かつてスパルタ人たちによって崇拜されていた。古代ローマでは、心を苛むさまざまな感情の中で、悲しみとともにもっとも激しいものとされ、女神アンゲローナという名で畏れられていた。アウグスティヌスが『神の国』(4.8)でウェアロを典拠に言うように、恐れは普通、神殿で獅子の頭をもつものとして描かれ崇められていたのだ。またマクロビウスの『農神祭』(1.10)によれば、「一月一日はアンゲローナの祝日であり、快樂の女神ウォルプタースの神殿では、神官と司祭が、縁起をかついで年に一度のお供えをした。その一年、アンゲローナが、彼らの心配事や心の苦しみ、心の悩みをすべて追い払ってくれるように願ってである」。恐れは、多くの痛ましい変化を惹き起こし、これにとらわれると人は赤くなったり、青白くなったり、震えたり、汗をかいたりする。また体中に突然、冷氣と熱気が生じ、動悸が激しくなったり、失神したりもする。公の場や偉い人の前に出たり、話したりしなければならぬとき、この感情にとらわれる人は多い。キケロも演説を開始するときはいつも震えていたと告白しているし、フィリッポス王の面前で偉大な演説をしたギリシアのデモステネスも同様だった。ルキアノスが『悲劇役者ゼウス』で面白く書いているように、声が出なくなり、記憶が混乱するのである。この作品でゼウスは他の神々の前で演説をすることになるのだが、聴衆が怖くなって、あらかじめ用意してきた言葉を忘れてしまい、ヘルメスに助けてもらう始末。多くの人は恐れのために慌てふためき、自分のいる場所や、自分が何を言っているのか、何をしているのかがわからなくなる。極端な場合には、この恐れや不安は演説の何日も前から続き、当時者を苦しめる。恐れのために立派な行いが妨げられ、その人の心は痛み、悲しみ、重くなる。恐れのうち生きる人は決して自由な気

持ちにはなれず、意志も弱く、心配事が多い。決して楽しむことができず、たえず苦しみの中にある。ヴィヴェスの言葉にあるように、「恐れほど悲惨なものはなく」、これに匹敵する責苦、拷問はない。恐れにとりつかれた人は、つねに疑心暗鬼で、不安で、心配しているので、理性と判断力を失って、まるで子供のようにうな垂れるが、「特になにか恐ろしいものが示された場合がひどい」とプルタルコスは言う。「想像力の力についての脱線」で示したように、恐れはしばしば、突然、狂気やありとあらゆる病気を惹き起こす。この点については「恐怖」の項目でさらに詳述する。恐れに陥ると、我々は想像力で恐れのおもむくままに想像してしまうので、アグリッパとカルダーノが主張するように、悪魔を呼び寄せてしまう。あらゆる感情の中で、我々の想像力を支配するのは恐れであり、ことに暗闇にいる場合が激しい。これは多くの人に見られることで、ラーヴァータが言うように、「人は恐れるものをつくりだすのだ」。ゴブリンや妖女や悪魔が見えるという人たちは、多くの場合、それによって憂鬱症になってしまう。カルダーノの『精妙さについて』(18)には、お化けを見た恐れのために憂鬱症に罹り、一生治らなかった人の例があがっている。皇帝アウグストゥスは暗闇にいるのを嫌がり、スウェトニウスによると、「誰かそばにいない限り、彼は暗闇で目を開けていることはなかった」。女性や子供たちが夜中に墓地に行ったり、暗い部屋で寝ていたり、一人でいると、奇妙なことを考え、突然、汗をかきはじめたり、震えたりする。未来の出来事や、自分たちの運命や定めを知ることによって悩む人は多く、セウエルス帝やハドリアヌス帝やドミティアヌス帝などは、スウェトニウス曰く「人生最期の日を知ったがゆえに、大いに案じていた」。こういった例は多く、適宜扱っていくつもりである。ただ不安、慈悲、憐れみ、憤怒など、恐れと悲しみという二つの幹から派生する夥しい数の感情については割愛する。詳細はカルロ・パスカーリ、ダンディーらを参照してほしい。

## 第6項

### 原因としての恥と不名誉。

恥と不名誉は非常に激しい情念を惹き起こし、痛烈な苦しみの原因となる。「気高き心も、公の場で被る恥と不名誉によって、しばしば動揺し、過ちを起こす」(フェリクス・プラタ3巻「錯乱した心」)。またユダエウス(『神の摂理』2巻)が言うように、「恐怖、欲望、悲しみ、野心、羞恥心に身をさらす者は、幸せになれず、ひどく惨めで、やむことのない苦しみ、心配事、惨めな気持ちに苦しめられる」。羞恥心の攻撃はどの情念にも劣らぬくらい激しい。「世の喧騒にかまわず、栄光を好まぬ人は多いが、こういった人も、恥をかくこと、拒絶されること、不名誉を被ることは恐れている。快樂を厳しく退けたり、平然と悲しみに耐えたりすることはできても、非難されたり、悪口を言われると、まともに攻撃を受け、打ちのめされ、壊れてしまう。(実際、人生と名声とは同じ歩調で歩いているのだ)」(キケロ、『義務について』1巻)。公の場で侮辱されたり、不名誉を被ると、多くの場合、人は落ち込む。たとえば、自分より弱い者に横っ面を殴られたり、対抗者に負かされたり、闘いで負けたり、演説で失敗したり、汚いことをしたり、あ

るいはそれが暴露されたりすると、人は落ち込むあまり、その後、死ぬまで外出を避け、家の片隅で憂鬱にうずくまり、穴の中に閉じこもる。高貴なる精神であればこそ、恥には弱い。ヒエロニムスが言うように、羞恥心は「高貴で気高い精神を破壊するのだ」。アリストテレスはエウリーポス海峡の流れを理解することができず、それを悲しみ、恥ずかしく思って、そこに身投げした(チェリ・リッキエリ、『古代逸話集』29.8)。またウァレリウス・マキシムス(9.12)によると、「漁師の出したなぞなぞを解くことができず、ホメロスは恥ずかしさのあまり身を滅ぼした」というし、ソポクレスも「自分の書いた悲劇が聴衆の嘲笑を受けて中断されたため」自殺したという。ルクレティアは自らに刃を向け自殺したが、クレオパトラも「戦利品として捕えられるのがわかると、辱めを受けるよりは」と命を絶った。一方「アントニウスは、敵に破れた後、人との交わりを一切避け、三日間、クレオパトラとさえ話さず、船の舳先に座り込み、深く恥じ入り、自らの身体を引き裂き、自殺した」(プルタルコス「アントニウス伝」)。「ロードスのアポロニオスは、詩の吟唱で失敗したのを恥じ、自ら進んで追放の身となり、祖国と親友たちを捨てた」(プリニウス7.23)。アイアスは、自分のものになると思っていたアキレスの武具をオデュッセウスのものとする判定が下されると狂った。中国でも、追放の判定を下されたり、科挙の試験に失敗した人が、恥ずかしさと悲しみのあまり正気を失う、というのはよくある話である(マテオ・リッチ『中国旅行』3.9)。修道士ホーグストラテンは、政敵ロイヒリンの書いた『見知らぬ人々の書簡』という彼に対する中傷本のことをひどく気にし、恥ずかしさと悲しみに襲われ自殺した(ジョヴィオ『格言集』)。オランダのアルクマールで説教師をしていた真面目で学識ある牧師は、ある日、気晴らしに散歩していると、突然尿意に襲われ、仕方なく近くの溝に逃げ込んで用を足していた。しかし、油断しているところを、ちょうどそこを通りかかった教区の女性たちに見られてしまい、大いに恥じ入り、それ以後、公の場に姿をあらわすことなく、もちろん説教壇にも立たず、憂鬱症のために衰弱死した(ピータ・フォレスト『診察集』10.12)。このように、羞恥心は、激しさという点で、ほかの情念に勝るとも劣らない。

もちろん、卑しくて下品で厚かましい輩もたくさんいて、そういったごろつき連中は「どんな咎をおかしても顔色ひとつ変えず」、何事にも動じず、不面目や不名誉を意に介さず、すべてを笑い飛ばす。たとえば、彼らは偽証していたことがばれたり、汚名を着せられたり、ごろつき・盗人・裏切り者であるとの宣告を受けても気にしない。耳をそがれたり、鞭打ちされたり、烙印を押されたり、引きずりの刑を受けたり、指をさされても平気。嘲られ、罵られ、軽蔑されても、プラウトゥスに出てくる売春宿のパッリオと一緒に、「そんなに褒めなくても」だの、「おや、まあ」だの、「あらら」といった具合で、全然気にせず、むしろ楽しむのである。最近、こういった輩がやたらと増えてしまい、

メルケルテースなら叫ぶだろう。自らの行いに対する  
人々の羞恥心はなくなってしまった、と。



しかし、謙虚な人、気品と気高き精神をもち、自分の評判を気にする人は、羞恥心にとらわれると深く傷つき、激しく苦しむので、名誉が少しでも汚されたり、その名に少しでも傷がつくくらいなら、大金、いや自分の命を捨てたほうがましだと考える。そして、それを避けることができないのだとしたら、ミザルドゥス曰く「歌合戦で負けると死ぬ」ナイチンゲールのように、ふさぎこみ、精神の苦痛に衰弱してしまう。

## 第7項

### 原因としての嫉妬、悪意、憎悪。

嫉妬と悪意はこの鎖を形成する二つの輪であり、グアイネリオ(15.2)がガレノス(『警句集』3.22)を典拠に示すように、どちらも、「それだけでこの病気を惹き起こす。ゆえに患者の身体が他の原因で憂鬱症に罹りやすくなっている場合はなおさらである」。バルスコン・ドゥ・タラントとフェリクス・プラタの見解によると、「嫉妬は多くの人の心を苛み、その人たちは一様に憂鬱症になる」。ソロモンが『箴言』(14. 13)で嫉妬を「骨を蝕むもの」、キプリアヌスが「見えざる傷」と呼ぶのも、おそらくこのためであろう。

シチリアの暴君たちでさえ、これほど恐ろしい  
責苦を生み出すことはなかった。

嫉妬は魂を磔にし、身体を萎ませる。嫉妬にかられる者は、目が虚ろとなり、蒼白となり、やせ衰えて、見るも無残な姿となる(キプリアヌス『説教』2「嫉みと妬みについて」)。まるで「蛾が衣服を蝕むように、嫉妬は人を消尽する」(クリュソストモス)。人は動く骨。「骸骨、やせこけて蒼ざめた屍が悪魔によって動かされているだけ」(ホール『性格論』)となる。というのも、嫉妬深い人は、他人が、金持になったり、幸運に恵まれて成功したり、名誉や役職を得たりなどして栄えるのを見ると、大抵の場合、嘆き悲しむ。

人の成功を見ることで、嫉妬深い人はやせ衰え、  
それがわが身への罰となる。

同輩や友人や隣人が鼻屑されたり、褒められたり、成功すると、嫉妬深い人は苦しむ。そして、その成功を思うたびに、何度でも苦しむ。その人にとって、他人がうまくやっているのを聞くことほど大きな苦痛はない。人の成功を見るのは、胸を短剣で突き刺される思いである。ルキアノスの名誉の岩で倒れた人々と同じように、彼は成功者を嫉妬深い目で見つめ、敵に危害を加えるつもりで、自分に害を加える。相手に両目を失わせるために自から片目を失った、イソップに出てくる男のように。あるいは隣人の蜜蜂が蜂蜜を取れないようにするため、自分の庭の花に毒を

まいた、クインティリアヌスに出てくる金持ちの男のように。こういった人の人生はつねに悲嘆に満ち、口にする言葉はすべて皮肉。他人の没落こそが絶大な喜び。というのも、煎じ詰めると、嫉妬とは、過去のことであれ、現在のことであれ、未来のことであれ、「人の幸せに対する嘆き、人の逆境に対する喜び」に他ならない。これは人の不幸を悲しむ慈悲心の反対である（慈悲心もまた身体には害であるのだが）。このように定義するのは、ダマスクスのヨハネ（「正統なる信仰」）、トマス・アクィナス（22. 36. 1）、アリストテレス『弁論術』（2. 4, 10）、プラトン『ピレボス』、キケロ『トゥスクルム論叢』3巻、グレゴリウス一世『魂の力』（12）、バジル「嫉妬論」、ピンダロス『祝勝歌』（1. 5）であるが、まさにその通りだと思う。人の成功に対して嫉妬することはよく起こる病気であり、タキトゥスが言うように、我々の本性と言っても過言ではない。そして、大抵の場合、嫉妬は治療することのできない病気である。マルクス・アウレリウス曰く、「嫉妬の治療法を求めて、ギリシア、ヘブライ、カルデアの著作家を読み、多くの賢人の書にも当たってみたが、結局、見つけることはできず、すべての幸せを否定し、一生、哀れで惨めであるしかなかった」。嫉妬は、この世での地獄の始まりであり、逃れることのできない受難である。「他の罪には、それに伴う喜びがあったり、宥赦の余地があったりするが、嫉妬だけはどちらも得ない。他の罪は一時的なものであり、たとえば貪欲は充たされうるし、怒りは止み、憎悪にも終りがある。しかし、嫉妬だけは止むことがない」（カルダーノ「知識論」）。聖書にも史書にも、嫉妬の例は馴染み深く、すぐに見つけて読むことができる。サウルとダヴィデの話、カインとアベルの話もその例で、サウルとカインが「苛立ったのは、弟が過失を犯したからではなく、弟の方が幸運だったからである」（テオドレトス）。ラケルが姉に嫉妬したのは、自分に子供がいなかったからだ。（『創世記』30）。ヨセフの兄弟たちも同様に彼に嫉妬した（『創世記』37）。ダヴィデにも、『詩篇』（73）で告白しているように、この悪徳の気があった。エレミアとハバククも人の成功を嘆いたが、彼らの場合、最終的には立ち直った。『詩篇』（75）には「くよくよすることなかれ」云々とある。皇帝ドミティアヌスは將軍アグリコラに対し「一介の私人がこんなにも栄光を受けるとは」とその評価を軽蔑した。ケキーナは、その服装が豪勢だったので、市民たちの嫉妬の対象だった。しかし、何より嫉妬深いのは女性である。「美しさのことになる女は嫉妬深く」（ムーサイオス）、「愛するか、嫌うかで、その間には何も無い」（ルイス・デ・グラナダ）。「傷ついた女の恨みは、たいてい、執念深い」。かのアグリッピーナのように、女性は「隣人の服装や装飾品が自分のよりも上品だったり、優雅だったり、豪華だったりすると、激昂し、雌ライオンのように夫に襲いかかり、相手の女性のことが堪えられず、罵り、嘲る」。タキトゥスにも同様の話がある。ローマの貴婦人たちは、ソロニナ・ケキーナの妻が「自分たちよりもいい馬といい家具を持っているので、まるでそのことで彼女が自分たちに怪我を負わせたと言わんばかりに、大いに腹を立てた」。我々のまわりの貴婦人も同類で、二人の女性が出会うとたいてい、片方がもう片方の美装と幸せに嘆き、軽蔑の言葉を吐く。ミュルシーネというアッティカの女性は「美しさの面で飛びぬけていたため」（カッシアーヌス『農耕論』11. 17）、仲間たちに殺されたという。これと似たような例はどの村を探しても見つかるだろう。

## 第8項

### 原因としての対抗心、悪意、派閥争い、復讐願望。

この嫉妬を根源として、派閥争いや悪意、恨みや対抗心といった暗鬱な感情が派生する。これらも同様の苦悩を惹き起こし、魂を苛む鋸であり、当惑に満ちた感情である。あるいはキプリアヌスが対抗心を形容して言うように、「魂を消耗させる蛾であり、他人の幸せによってその魂の持ち主を悲惨な状態に陥れる。すると、その人は自らを拷問にかけ、磔に架け、処刑し、自分自身の心を食い尽くしてしまう。そうすると食物や飲物を与えたところで効果なく、昼夜、途絶えることなくつねに苦悩し、ため息をつき、呻き声をあげ、心が引き裂かれてしまう」。少し後にはこうある。「君が対抗心を抱き、妬んでいる相手が誰であれ、その人は、君のことを何とも思っていないかもしれないが、君自身は、その人から逃れることができず、また君自身からも逃れることができなくなる。君がどこにしようとも、悪意と嫉妬心を抱き続けるかぎり、その人は君についてまわる。というのも君の敵はつねに君の心の中にいるからだ。そして君は自らのうちに爆弾をかかえ、手足を縛られた囚人となり、それゆえ、安らぎを得ることはできない。実は、これは悪魔による攻撃なのである」。そして、こういった感情にとらわれているかぎり、対抗心はなくならない。しかし、これほど頻繁に起こる心の乱れはなく、これほどよく起こる感情はない。

陶工は陶工、大工は大工を恨み

物乞いは物乞い、歌手は歌手を羨む。

どの社会、どの仲間、どの家族をとってみても、この対抗心に満ちている。この感情にとりつかれるのは、ほとんどすべての種類の人間であり、君主から耕夫に至るまで、ときには親友間にさえ見られる。わずか三人でも集えば、そのうち二人の間に仲間意識、派閥争い、対抗心が芽生え、三人の間にライバル意識、仲違い、個人的怨恨、妬みが生じる。田舎に郷土が二人でもいると（親戚関係、あるいは姻戚関係にない限り）、その二人の間、そしてその二人の召使たちの間に対抗心が生じ、妻や子供、友人や追従者たちの間にまで諍いや怨恨が生まれる。それはどちらが金持ちで、どちらの身分が上か、どちらが優れているかといった争いで、そのために彼らは、「雄牛の大きさにまで膨れ上がろうとして、終いには破裂してしまう」イソップの蛙のように、手持ちの財産や身の丈を越えた生活をし、長きにわたって張り合おうとするので、訴訟争いに巻き込まれ、あるいは、大盤振る舞いしたり、パーティを開いたり、豪華な服や大層な肩書きを手に入れたりしようとするので、財産を使い果たしてしまう。というのも、我々はみな、金もないのに見栄をはろうとするものだからである。相手に勝ろうとして、競い合う二人は自らの身体を疲弊させ、魂をやつれさせる。そして競い合ったり、あるいは互いに見栄をはって招待し合うことで、貧乏になる。同様に、ある時代に二人の偉大な学者がいると、激しく罵り合って仲違いし、その争いは弟子たちにも波及する。スコトゥス学派とトマス主義者、実在論者と唯名論者、プラトン

とアリストテレス、ガレノス学派とパラケルスス学派などなど。このように対抗心はあらゆる職種で生じる。

あらゆる職業、特に学問における真摯な対抗心は、**才知の砥石**とも呼ばれるくらいで忌み嫌うべきものではない。実際、これは才知と勇気の育て親であり、このライバル精神から気高きローマ人たちは勇敢な偉業を成し遂げた。サラミスの海戦の将軍テミストクレスがマラトンの戦いにおける将軍ミルティアデスの栄光に鼓舞されたときのように、またアキレスの勝利の記録がアレクサンドロス大王を突き動かしたときのように、野心にも適度なものがある。

つねに競い合おうとするのは、愚かな思いあがり、  
しかし、競争心が全然ないのも、怠惰なおごり。

まったく対抗心を抱かず、人と競おうとしないのは怠惰な気質である。本来、生まれや地位、財産や教育から競争の場につくべく生まれ、その適性と能力があるにも拘らず、怠け癖や貧乏性から、あるいは怖がったり、恥らったりすることで、引き籠もり、そういった地位や名誉や役職を避けようとするのはよくないことだ。しかし、対抗心も度を越すと、厄介で惨めな苦痛となる。かの有名な会談で、ヘンリ八世とフランスのフランソワ一世は、対抗心から巨額の金を費やすこととなった。どれほど多くの宮廷人たちが、相手に勝ろうとするために、見栄をはって生計を切り崩し、財産を使い果たし、困窮して死んでいったことだろうか。皇帝ハドリアヌスはこの対抗意識に激しく苛まれ、自分のライバルたちを皆殺しにしたが、これは皇帝ネロも同様。僭主ディオニシウスもこの感情に駆られ、プラトンと詩人ピロクセヌスを追放したが、これはプラトンとピロクセヌスが自分よりも優れ、二人の存在によって自分の栄光が翳ってしまうと考えたからである。同じ理由から、ローマ人たちはコリオラヌスを国外へ追放し、カミルスを監禁し、スキピオを殺害した。ギリシア人たちは陶片追放によって、アリスティデスとニキアスとアルキビアデスを追放し、テセウスを投獄し、フォキオンを殺害したりした。聖地エルサレムのアクレを占領する際、リチャード一世とフランスのフィリップ二世はともに戦った仲間であったが、リチャードの方がより勇敢な男であることが判明し、人々の目がすべてリチャードに注がれるようになると、フィリップは対抗意識に苛まれたという。私が典拠とする作者によると、「イギリス国王の勝利はフランス国王を苛立たせた。フィリップはリチャードの栄光を忌々しく思っていたので、相手の悪評をかき集め、その偉業に難癖をつけた」。もはやフィリップはいたたまれず、自国に戻ると、リチャードの領地に侵攻し、開戦を宣言したのである。「悪意は諍いを生み」(『箴言』10. 12)、ついには決裂して尽きることのない敵意を生じる。互いに憎悪を抱くようになるが、それはローマ教皇の憎しみと怒りよりも激しく、互いにその相手のみならず、その友人と追隨者、さらにはその子孫全員を迫害する。憎々しげな愚弄の言葉を投げかけ、敵意にみちた喧嘩をしかける。口汚く罵っては、中傷し、悪人呼ばわりし、家に火をつけたり、剣で切りつけたりし、けっ



して和解することはない。イタリアにおける教皇ゲルフ派と皇帝ギベリン派、ジェノヴァのアドルノ派とフレゴソ派、ローマにおけるグナエウス・パピリウスとクイントゥス・ファビウス、カエサルとポンペイウス、フランスにおけるオルレアン家とバーガンディ家、イングランドのヨーク家とランカスター家など、諍いの事例は枚挙にいとまがない。さらにこの感情は何度でも激烈になるので、人と人、家と家だけでなく、カルタゴとコリントの例が示すように、大都市と大都市の間にも起こる。それどころか、繁栄する国家間にさえ起こり、この感情によって国自体が荒廃することもある。そもそも拷問台、刑車、つるし刑具、真鍮の牛、野蛮な器具といった拷問具、牢獄や苛烈な法律は、互いを衰えさせ、苦しめるために、こういった悪意、敵意、派閥争い、復讐願望が生み出したものである。我々がもし自制することができ、当然すべきこととして、中傷を受けても耐え、謙虚な気持と柔らかな気持と忍耐力を学び、その中傷を忘れ、許すことができるならば、我々はこの上なく幸せであり、祝福の日々と、快く満たされた気持で人生を終えることができるだろう。神の言葉にあるように、我々はひとつなのだから、我々の間で生じる小さな諍いは鎮め、この種の感情を和らげ、パウロが言うように、「自分自身よりも他人のことを良く思い、互いに対して同じ気持となり、復讐心を抱くことなく、すべての人と平和にくらす」べきである。しかし、実際の我々は怒りっぽくねじけていて、横柄で傲慢、派閥心むき出しで煽動的、悪意と嫉妬に満ちているので、互いに嫌がらせをし、悪口を言って悩ませ、苦しめて、平穏を乱す。こうすることで、我々は苦痛と不安の渦のなかに陥り、その惨めさを助長し、憂鬱となり、自分自身の上に、地獄と永遠の墮獄を積み上げるのである。

## 第9項

### 原因としての怒り。

怒りは心の乱れであり、精気を外部に発散するので、身体を憂鬱症に罹りやすくするのだが、それ自体が狂気である。ホラティウス曰く怒りは短い狂気である。ピッコロミーニは、怒りをもっとも激しい感情の三つのうちの一つであると説明する。アレテウスはこの病気を惹き起こす理由として、とりわけ怒りをあげる（セネカ『書簡集』18.1も同様）。マイノ・デ・マイネリはその理由として、「怒りが頻発すると、身体が過度に熱くなる」からとし、聖アンブロウシスも「あまり頻繁に怒ると、見るからに狂気となる」と言う。人口に膾炙した諺にある如く、「たび重なる怒りは忍耐を狂気に変える」。怒りは聖人をも悪魔に変えてしまうのである。おそらく、バジルが説教「怒りについて」で、怒りを「理性の暗闇、魂の病氣、最悪の悪魔」と呼ぶのはそのためだろう。『勘当息子』でルキアノスも、とりわけ老人や老婆において、怒りがこういった作用を生み出すとする。「怒りと中傷によって、彼らはまず苦しみ、しばらくすると明らかな狂気となる。女性が狂気となる原因はたくさんあるが、特に愛しすぎたり、憎みすぎたりする場合、あるいは嫉妬心を抱いた場合、悲しみすぎたり、怒りすぎたりする場合、狂気になりやすい。そして、こういった場合、だんだんと憂鬱症になっていく」。つまり、一時的な状態から永続的な状

態へと進行するのである。というのも、発作時において、狂った人と怒った人の間に区別はないからである。ラクタンティウスが言うように（ドナトゥス宛『神の怒りについて』5）、怒りは「**魂の荒れ狂う嵐**」であり、怒った人は「目から火が出て星が飛び、歯軋りをし、舌はもつれ、顔色が蒼白、あるいは真っ赤になり、その他にも狂った人と似たような不快きわまりない症状を見せる」。

**怒ると人は顔が膨らみ、血管には血がたぎり、  
目の光はゴルゴンの蛇よりも恐ろしい。**

怒れる人は、しばらくの間、理性を失い、何を言っても無駄な状態で、周りが見えず、獣や怪物のようになる。自分でもわけのわからぬことをしたり、意味不明のことを言ったりする。さらに呪ったり、罵ったり、悪口を言ったり、喧嘩をしたりなどなど。これでは狂った人とかかわらないではないか。テレンティウスの喜劇の登場人物が言うように、「**怒りで自分が自分でなくなる**」のだ。こういった発作が度を越したものであったり、長時間持続したり、頻繁に起きたりすると、間違いなく狂気を誘発する。ダ・モンテは『診察』（21）でユダヤ人の憂鬱症患者を扱っているが、「**その患者はちょっとしたことですぐに怒った**」と述べ、怒りをその主要因としている。アイアスが狂ったのも、他ならず怒りがきっかけであった。かのフランス国王シャルル六世が狂気に陥ったのも、ブルターニュ公に対する怒りと復讐心と悪意が激しさを増したためであった。王は幾日も、食物や飲物が喉を通らなくなり、眠ることもできなくなって、ついには1392年7月1日、馬に乗ったまま発狂した。王は剣を抜き、誰彼かまわず近づく者に切りつけたという。そしてこの狂気は王が死ぬまで続いた（エミリ『フランス史』10巻）。ヘゲシップスの『エルサレム陥落』（1.37）には、これと似たヘロデ王の話が載っている。ヘロデ王は怒りの発作から狂気となり、寝台から飛び起きて、ヨシップスを殺害し、他にも多くの狂行を繰り返したので、宮廷全体で王を取り押さえにかかったが、なかなかおさまらなかつた。「**怒りが和らぐ**」と、王は自分のしたことをすまなく思い、後悔し、激しく嘆き悲しむこともあったが、しばらくするとまた暴れ出したという。ペレツィウスが『情と病の治療』（1.21）で述べるように、身体が熱く胆汁質の場合、怒りほどさまざまな病氣、とりわけ狂気と直結する感情はない。「**怒りは血液を減らし、胆汁を増やす**」のだ。またデ・ヴァレスが『医学・哲学論叢』（5.8）で議論するように、怒りが死に至る場合も多々ある。これがもし怒りのもたらす最悪の結果だとしたら、まだいいのだが、「怒りが破滅をもたらすのは、町全体、都市全域、一族をまるごと、王国すべてである」。セネカが『怒りについて』1巻で言うように、「**これほど人類に害悪をもたらすものはない**」。我々の歴史を紐解くと、狂った連中が怒りにまかせてしてきたことばかりである。それゆえ、憂鬱症を惹き起こす心の乱れを論じてきた我々の議論に、怒りが含まれるのは当然といえよう。「心の盲目、傲慢、虚栄、偽善、嫉妬、憎悪、悪意、怒りなどの、有害な心の乱れすべてから、主よ、我々を救いたまえ」。

## 第10項 原因としての不満、不安、失意など。

不満、不安、いらだち、失意といったものは、いずれも、悲しみ、苦しみ、当惑といった精気の乱れの原因となり、「心の乱れ」として論じてしかるべきものであろう。この項目に入れるのは不当だと言う人もいるかもしれないが、『弁論術』におけるアリストテレスの定義に従うと、こういった不安は、嫉妬や対抗心などと同じく悲しみ的一种なのである。これらは、ここまで論じてきたものと同様、憂鬱症の原因かつ症状であり、同種の不都合を生じ、多くの場合、苦しみと苦痛を伴う点からも、この「気概的」項目に列してもよい、と私は考える。「心を焼くよう」なので「心配」とする俗説語源も、この扱いの正当性を補強してくれる。詩人たちは、不安を形容するのに「狂わせるもの」、「眠りを奪うもの」、「破滅をさそうもの」、「悲しみを惹き起こすもの」、「心を苛むもの」、「死に至らしめるもの」、貪り尽くすもの、残酷なもの、苦痛をもたらすもの、心を乱すもの、蒼ざめさせるもの、恐ろしいもの、悲惨なもの、堪えられないものといった表現を使う。この世にはあれこれ不安があり、その数は浜辺の砂子ほど多い。ガレノス、フェルネル、フェリクス・プラタ、バルスコン・ドゥ・タラントなどは、不安と失意だけでなく、こういった心の葛藤や苛立ちをすべて主要因とみなしている。これらがみな、眠りを奪い、体液の調合を妨げ、身体を干からびさせ、その実質を消耗するからである。こういった心の葛藤や苛立ちは、種類こそ多くないが、原因はさまざまあり、こういった状態に陥らない人など千人に一人もいない。ホメロスに出てくる女神アーテーは、

人の頭上をやさしく歩き、  
その足の裏はやわらかく、

人を狂気に導くという。そのアーテーによって、一度も不満に陥れられたこと、あるいは、失意などで苦しめられたこともない、と言い張れる人などいない。人が不安から自由になれないことに関しては、ヒュギヌス『寓話』(220)に面白い話がある。かつて女神クーラが小川を渡ることがあったのだが、そのとき彼女は川底の汚い泥をとって、自分の似姿を作った。すると、すぐにユピテルがやってきて、その似姿に息をふき込んだ。クーラとユピテルはこの生き物の名前を何とするか、どちらの所有とするかで意見がわかれ、この件はサトゥルヌスに審判となってもらって決めることとなった。そのとき下された判決は以下の通り。このものの名は「土からとられたので人とする。これが生きている間はクーラの所有とし」、死後、その魂をユピテル、その身体をテルースの所有とする、と。物語はこのくらいにしておこう。不満と不安と失意は、一般因であり、持続因でもあって、あらゆる人に必ず起こる。この世で生きていく上で人をこれほど苦しめる苦痛はなく、誰もそこからのがれることはできない。人は、あらゆる人に共通するこの悲惨な状況を考えるだけで、衰弱し、生きていくことに疲れてしまう。自分をつねに危険と悲しみ、

悲痛と迫害にさらされ、決して安心することはできないと考えてしまうのだ。というのも、プリニウスが巧みに表現しているように、人はこの世に生を受けるとき、「裸のままに産み落とされ、生れ落ちた瞬間から泣き叫ぶ。そして襦袢を巻きつけられ囚人のように拘束され、自分ひとりでは何もできず、この状態が死ぬまで続く」。セネカ曰く、人は「あらゆる野獣の餌食」で、暑さと寒さに耐えられず、労働に耐えられないかと思うと、無為にも耐えられず、運命の女神に弄ばれるがままである。ルクレティウスはこの状態を、船が難破して岸に打ち上げられた水夫に喩える。見知らぬ土地で、着るものもなく凍え、不便な生活を強いられる。いかなる身分、年齢、性別であっても、この悲惨な状態から抜け出すことはできない。「女より生まれし者の人生は、短く、困難に満ちている」（『ヨブ記』14. 1, 22）。「肉体をまよえば、悲しみに満ち、魂をうちに抱けば、悲痛の声をあげる。毎日が悲しみであり、労苦も辛く、その心は夜も安らぎを得ることはできない」（『伝道の書』2. 23）。「人のなすことはすべてが精気の悲しみと苦しみである」（同2. 11）。「生まれるとき、成長するとき、老けていくとき、死ぬとき、どれも似たようなもので、始まりは盲目、真ん中は労苦、最後は悲しみ、そしてこれらすべてを通して常に過ちが我々を襲う。なんらかの悲しみ、心配、苦痛なしに送れる日など一日もない。たとえ憂いなく心地よい朝を迎えたとしても、夕暮れには台無しになってしまう」。みじめな日の次は、馬鹿げた日、その次には忌々しい日。また人が嘆きをもらす苦痛にもいろいろある。セネカ曰く「頭が痛いかと思うと、足が痛い。肺の具合が悪いかと思うと肝臓の具合が悪い。血が足りないかと思うと、多血で困る」。「富みたる人も、生まれは卑しく」、高貴な者は、貧困にあえぐ。財産はもっていても、健康にすぐれない、あるいはその財産を運用する知性に欠けるかもしれない。子供が悩みの種の人もいれば、妻が厄介という人もいて十人十色。「自分の置かれた状況にたやすく満足するものなどいない」。一ポンドの悲しみに対して、一ドラムの満足が積るの山、喜びはないに等しく、慰めもほとんどない（喜びはまったくなくともある）。そこら中にあるのは危険と争いと不安である。どこに行ったとしても、そこで見つかるのは、不満、心配、嘆き、不平、病、疫病、厄介者、叫び声であろう。クリュソストモス曰く「市場をのぞけば、そこにあるのは喧嘩や諍い。宮廷に目を転じて、不正や追従などが目に付き、個人の家を向ければ、そこに見出されるのは悩みの種と心配、重苦しい雰囲気」。古にホメロスが言ったごとく、

母なる大地で息する生き物の中で、人間ほど悲惨なものはない。

ベルナールが看破したように、人はどこにいようと、「身体の、精神の、心の悲惨な状態にあって、寝ていても、起きていても悲惨に苛まれる」。「この世における人生は試練にすぎず、永遠に続く悪の鎖であり、この苦悩と困難に耐えうる者などいない」（アウグスティヌス『告白』10. 28）。「我々は順境にあって傲慢で鼻もちならず、逆境にあって落胆し、あらゆる運命のもと愚かで惨めである」。「逆境にあると順境を渴望して苦しみ、順境にあると逆境を恐れて苦しむ。中庸はどこに見出せるのか。試練のない生はどこにあるのか。どんな生ならば自由なのだろうか」。「知



性には努力、栄光には嫉妬がつきまとう。富は不安、子どもは厄介もの、快樂は病氣、休息は物乞いへとつながる。プラトン主義者たちが主張するように、あたかも人は前世で罪をおかし、その罰のために現世に生まれてくるかのようだ。プリニウスが嘆くように、「あらゆる面を考慮に入れると、自然は我々の母というよりも継母なのかもしれない。人間の生ほど壊れやすく、恐怖に満ちあふれ、狂っていて、苛立たしいものはない。嫉妬や不満、悲痛や欲望、野心や迷信に苦しめられるのは人間だけなのだから」。我々の人生はつねにアイルランド海のごとく、そこに待ち受けるのは、吹き荒れる嵐と荒れ狂う波だけ、しかもそれはいつ果てるともしれぬ。

眼前に広がる海は荒れ狂い、  
とてもここから抜け出せそうにない。

風の日々が訪れることはなく、身の安全を確保したり、自分の置かれた状況に満足したりすることはない。またボエティウスが論じるように、「我々にはみな、手に入るまでは求めているのに、手に入った途端に嫌になってしまうところがある」。「我々は何かを熱望し、渴望するのだが、それが手元にあるとすぐにうんざりしてしまう」。よって

希望と不安の間、恐怖と怒りの間で、

落ち込んだり、立ち直ったりしながら、我々は全盛期を無駄にやりすごし、与えられた時間を愚弄する。我々が送ることのできるのは、諍いが多く、満たされることなく、騒々しく、憂鬱で、悲惨な人生だけである。それゆえ、我々がもし、生まれる前に未来のことを知ることができ、生まれるか否かを選択できるのであれば、この苦痛に満ちた人生を選択することはないだろう。

つまり、この世は、それ自体が迷路なのであり、誤謬の迷宮、砂漠、荒野、盗人や詐欺師の巢窟なのである。そこは濁った水たまりや、ゴツゴツした岩や、切り立った崖ばかり、まさに逆境の大海、重苦しい<sup>カリブデイス</sup>類木。病氣と災厄が波のように交互に押し寄せては、我々を襲う。たとえ岩礁を避けたとしても渦潮の餌食となるようなもので、我々は絶えず恐怖と労苦と苦悩の状態におかれ、疫病や災厄や重荷が、どんなに逃げても追ってくる「つらい隷属状態にある」。人間から失意と不満と心配、災難や危険を切り離そうとしても、それは鉛から重さ、炎から熱、水から湿気、太陽から明るさを切り離すようなものである。我々の町や都市は、人間という悲惨が集まり住む場所にすぎず、「そこには、悲痛と悲しみ、数えきれないほどの困難、死すべき人間の労苦、さまざまな悪徳が、まるでたくさんの檻に入って並んでいるかのようにぎっしり詰まっている」とボルハウスはソロンを典拠に巧く表現している。我々の村は、もぐら塚のようなもので、そこにいる人は無数の蟻のごとく、せわしく、つねにせわしく、行ったり来たり、出たり入ったりし、互いの領地を侵犯し合っている。その様はまるで地図や地球儀に書きこまれた、交錯する航程線

のようだ。「光があって楽しいと思っても」、当然のごとく「次第に悲しく重苦しくなる。希望を抱いても、すぐに不信にいたる。今日は忍耐強く耐えていても、翌日には泣き出してしまう。蒼ざめていたかと思うと、赤くなる。走っているかと思えば、座っている。汗をかいているかと思えば、立ち止まって震えている云々」。我々の中にはまれに、おそらく千人に一人くらいの割合で、世の尊敬を集める「ユピテルに愛される者」、幸せで幸運に恵まれた「その子孫」がいるが、「その幸せは嫉妬に通じる」。というのも、裕福で美しく、名誉にも役職にも恵まれた人も、おそらく自問自答して、自分こそが誰よりも惨めで不幸であると言うようになる。人は「かっこいい靴だね」と褒められても、「実は履くと痛いんだよ」と言うもので、他人から褒められても幸せになれない。セネカの至言にあるごとく、「たとえ世界の覇者であったとしても自分のことを幸せだと思えない人は惨めである。自分自身幸せだと思わない人は、幸せにはなれない。自分の境遇がどうであれ、それが他人にどう見えようとも、自分自身、気に入らないのだとしたら何の意味もない」。他人の境遇を羨ましく思い、自分の境遇を忌まわしく思うのは、すべての人に共通する気質である。ホラティウス曰く「他人の運命を好ましく思う人はもちろん自分の運命を忌まわしく思う」。しかし「マエケナスよ、どうして、こうになってしまう」。この原因はどこにあるのか。テオドレトスが言うように、ひねくれた性質の人は多く、何事にも容易に喜ばない。「お金があってもお金がなくても、どちらであっても喜ばない。健康であっても病気でであっても不平をもらし、順境であっても逆境であってもあらゆる運命に文句をつける。儲かっても儲からなくても、豊作であっても不作であっても悩み、戦争であれ平和であれ、子宝にめぐまれようと恵まれまいと、彼らが喜ぶことはない」。我々はたいてい、不満をいだき、悲惨で不幸極まりない。少なくともそう考える。これこそが我らの気質である。そうでない人、あるいはかつて一度でもそうでなかった人がいるというなら、お目にかかりたい。確かにクイントゥス・メテルスの幸せは、ローマ人たちの尽きることの無い称讃の対象であり、ウェレイウス＝パテルクルスによれば、幸福という点で彼に肩を並べられる人は、どの国民、階級、年齢、性別を探してもほとんど見つからなかったという。つまり、彼には「優れた心と身体と財産」があったのだが、この点で、クラスス・ムキアヌスも同じである。プリニウスの見解によれば、スパルタの女性ランピトも同様に幸せな人物であったとのことで、彼女は王の娘となり、王の妻となり、王の母となった。サモス島のポリュクラテスは世界中で尊敬されていた。ギリシア人たちはソクラテス、フォキュオン、アリスティデスを誇りに思っている。ソピスの人々はとりわけアグラウスを誇り、彼は「あらゆる危難を逃れ、生涯幸せであった」（パウサニアスはありえないと否定しているが）という。またローマ人たちは、運命に翻弄されることなく、隠棲して暮らし、感情を制御して、浮世を軽侮していたという点で、カトーとクリウスとファブリキウスを誇りとする。しかし、ここにあげた人々も誰一人として幸せではなかった。メテルスもクラススもポリュクラテスも不満から逃れることはできなかった。ポリュクラテスの最後は悲惨なものであったし、カトーも非業の死を遂げた。ラクタンティウスとテオドレトスは、ソクラテスについて「弱虫だ」などとさんざん悪口を言っているし、残りの人についても同様である。満たされた人生など存在しない。ソロモンが言うように、「あ

るのは空虚と魂の乱れだけ」、不具で不完全なのである。たとえサムソンの髪の毛、ミロの力、スカンデルベグの武具、ソロモンの知性、アブサロムの美しさ、クロイソスの富、パセスの魔法の銀貨、カエサルの勇気、アレクサンドロスの精神、キケロやデモステネスの雄弁、ギュゲスの指輪、ペルセウスのペガサス、ゴルゴンの首、ネストルの長寿を身につけることが出来たとしても、完全にはなりえず、相変わらず満たされることはない。少なくとも、それはいつまでも続くわけではない。たとえ歓喜のうちに笑っていたとしても、そこにも悲しみと悲痛はある。我々のうちに本当の幸せが訪れるとしても、それは束の間のことで、

上半身は美しい女性も、下半身は魚の姿。

晴れた朝も、雲垂れこめる午後へとかわる。ブルータスとカッシウスは、ともに高名で、突出して幸せであった頃もあるが、ウェレイウス＝パテルクルス曰く、彼らほど「早々に運命に見放された」者はいない。生涯を通して征服者であったハンニバルも、好敵手と出会い、ついには制圧されてしまう。

その強き者は、さらに強き者と出会ったのである。

ローマにおけるカエサル、アテネにおけるアルキビアデスのように、勝利の凱旋をし、「黄金の冠を戴き」、崇拜され、称讃されても、しばらくすると、その彫像は破壊され、本人もなじられ、虐殺されたりする。かの有名なスペイン人フェルナンデス・デ・コルドバも、最初のうちは君主からも人民からも崇拜され、その支持を得ていたが、すぐに監禁され、追放された。「崇拜に値する行動には、たいてい、激しい嫉妬と痛烈な悪口がついてまわる」とはポリビウスの見解である。金持ちとして生まれ、乞食として死ぬ人もいる。今日は健康でも、明日は病気かもしれない。栄華を誇り、幸運で幸福な人でも、次第に財産は見知らぬ敵に奪われ、盗人に強奪され、分捕られ、終いには捕えられ、ひもじい思いをする。ちょうど「鉄の鋸、鉄のまぐわ、鉄の斧で脅され、瓦を焼く窯へ入れられた」ラバの人々のように。

どうして君たちは、僕のことを幸せだと言うんだ。

確固たる足取りの人なら、つまづきなどしなかったさ。

かつてクセルクセスのごとく多くの軍隊を引き連れて行進し、あるいはクラエススのように豪華絢爛な行進をした者も、すぐに鉄の鎖に縛られて、ひとり舢舨に乗せられる。トルコの皇帝バヤジトの辿った運命のように。あるいはペルシア王に踏みつけられたローマ皇帝ヴァレリアヌスのように。都市が火事になった場合の犠牲者は多く、セネカはかつて燃え尽きた都市について、「昨日まで巨大都市であったものが、今は何も残らない」と語ったことがあるが、この感情の破壊力

も同様である。自分の周りで起こる出来事、あるいは自分自身の分別のなさ、度を越した欲望によって生じる数多くの苦しみのため、昨日まで人間であったものが、今は何も残らない。さらに悪いことに、不満や失意に苛まれなくても、不満と失意に苛まれていた方がまじだったのと思いたくなるほど、「人は人に対して悪魔」となる。我々は人に対して攻撃をしかけ、迫害するようになるのだ。日々研究するのは、互いに憎んだり、罵倒したり、怪我をさせたり、餌食にしたり、食らい尽くしたりすることで、相手を傷つけ、陥れたり、悩ましたりする方法。その様はまるで死肉を食らう鳥たちのよう。またベテン師やポン引きや女衞のように、だまくらかし合い、狼や虎や鬼のように荒れ狂い、苦しめ合うことに喜びを見出す。人間はそもそも悪であり、邪悪であって、悪意に満ち、裏切りと汚い行為を繰り返す。愛し合うことはなく、愛するのは自分だけ。互いをもてなし、ほどこし合い、仲むつまじくすることなどなく、あるべき姿を忘れ、己の利欲のみを追及するために、善人面し、虚偽を働き、裏表のある生活を送る。薄情で、慈悲も憐れみもなく、自分が得することばかりを考え、その結果、人を傷つけることになろうと構うことはない。テオクリトスに出てくるプラクシノアとゴルゴーは、お金もちの家へ贅沢な眺めを見に行き、「これはすごい」と叫びつつ、そこから他の人たちを締め出してしまふ。そして彼女ら自身が金持ちになって、尊敬され、愛顧も受け、満たされて、手に入れたものを手に入れるようになると、若者たちがもつめる快樂、かつて自分たちも若い時分に楽しんできたはずの快樂を、自分たちだけのものとする。食事の際、柔らかい椅子に座ってくつろいでいる人は、その間ずっと疲れた給仕が自分の後ろに立ち続けていることに気を懸けない。エピクテトスも言うように「満腹な主人に食事を出す給仕は空腹で、喉が乾いているのに、飲物を主人に差し出し、主人が楽しそうに喋っているときも沈黙を守り、主人が笑っているときも沈鬱で真面目な顔つきをしている」。そして主人は「あふれる黄金の盃をがぶ飲みする」。宴会を催し、馬鹿騒ぎして、散財する。さまざまな衣服を買い込み、甘美な音楽を奏でさせ、安逸な生活を送り、この世が提供するあらゆる快樂を手に入れる。その間、通りでは貧しい人々の多くが空腹で飢え、呻き声を上げ、身体を覆う衣服さえままならず、一日中、重労働に耐えている。つまらぬものでも、腹の足しになるのであれば駆けつけ、馬を走らせ、日がな一日喧嘩をすることもある。病を抱え、疲弊し、苦痛と悲痛の日々で、心は嘆きと悲しみで押しつぶされている。主人は自分より劣る者たちを嫌って軽蔑し、自分と同等な者を憎んで対抗心を抱き、自分より優れた者たちを妬む。自分の支配下にある者たちを侮蔑するその様は、あたかも自分が人間ではなく、半神であり、決して没落することなく、人間的な弱点とは無縁であると思っているかのようだ。こういった人たちは、たいてい愛することなく、愛されることもない。彼らは他人の身体を絶え間ない労働でぼろぼろに使い果たしながら、自分たちは安寧に暮らし、他人のことを気に懸けることなく、「我と我が身のために生まれたと考えている」。救いの手を差し伸べるなど論外で、有能で登用されるべき者たち、自分たちよりも優れた者たち、自然の法に従えば、解放し助けてやらなければならない人々たちをも、彼らはあらゆる手段を行使して、その髓までも抑圧する。助けたり、楽にしてやることのできるにも関わらず、彼らは人々が、呻き、飢え、物乞いをし、首をつって自殺するのを横目に安

寧を貪る。その様はたいてい、あまりにも自然にもとり、あまりに思いやりがない。あまりに薄情で不寛容、傲慢で不遜、残虐で悪質。このように野獣のごとく、たがいに対して悪魔となるのであれば、我々には、あらゆることで不満をいだき、心配と嘆きと失意に満ちた生活を送るしか道は残されていないのである。

それでも人間が不満と失意に満ちた存在であることの証明にならないのだとしたら、状況別、職業別に見ていくことにしよう。国王、君主、僭主、支配者はきわめて幸せそうに見えるが、彼らの置かれた立場をよく見てほしい。国王たちこそ、絶え間ない恐怖と苦悶、猜疑心と嫉妬心に苛まれ、不安に満ちた生活を強いられていることに気づくはずだ。かつてユウェナリスが言ったように、あらかじめ王冠に伴う不満に満ちた生活のを知ることができれば、国王たちはそれを戴こうなどという気持ちにはならないだろう。クリュソストモス曰く「不安に苛まれぬ王がいるなら会わせてほしい」。「彼の王冠を見るのではなく、その苦しみを思いなさい。国王がつき従える数多くの召使ではなく、彼につきまとう数多くの苦難を思いなさい」。グレゴリウスも同様に「権力の頂点にいるというのは、心の嵐に晒されるということに他ならない」と言う。<sup>フェリクス</sup>の通称を持つスラでさえ、ひどい発作持ちだったりする。「称号における名誉は、魂における責苦」であり、デモステネスは「判事になるか死ぬかを選ばねばならぬとしたら」、死を選ぶと誓った。金持ちもこれと同じ苦境にある。彼らは自分たちの苦しみが何であるのか「愚かにもわからない、感じてはいるのだが」（これについては別のところで証明する）。彼らの富は子供のおもちゃのようにもろく、入ってきたと思えば出て行き、まったくあてにならない。富によって高められた人は、突然、貶められ、失意の谷に置き去りにされる。中流階級の人にも資産があり、それが重荷となる。たとえ自由で安寧に暮らしていたとしても、じきに疲弊する。贅沢と放蕩が続けば、諍いと対抗心などが芽生え、心身と財産を使い果たしてしまう。貧しい人とその不満については、また別のところで論じる。

個々の職業についても同様で、満足して安心できることはない。どの道を選べばいいのか、どう決心したらいいのかわからない。聖職者になっても、巷では馬鹿にされる。法律家になれば論争に巻き込まれるだけだ。医者になれば「小便検査で赤面」、忌々しい。哲学者は狂人、錬金術師は物乞い同然、詩人になれば「食いはぐれること必至」。音楽家は暇すぎて、学校の先生は忙しすぎ。農夫はまるで蟻のようだし、商人のもうけは不確実。職人は卑しく、外科医には吐き気が伴う。貿易商は嘘つきで、仕立て屋は泥棒。召使は奴隷、軍人は屠畜人と同じ。鍛冶や金細工師は、一日中、鍋とにらめっこ。宮廷人は宿木にすぎず、しかも森の中には自分が寄生すべき木が一本も見つからない。このように、満足を与えてくれる生活など存在しないのである。年齢についても同様のことが言える。子供は絶えず隷属状態に置かれ、常に暴君的な教師の支配下にある。成熟して若者になると、労働を強いられ、世俗の幾千もの心配事、すなわち裏切りや虚偽や詐欺に苛まれる。



——彼は火の上を歩いている。  
目を欺く灰に隠れた火の上を。

老齢になると頻繁に骨の節々が痛み、筋肉がひきつけやこむら返りを起こす。多くの死に別れを経験し、耳は遠くなり、目も見えなくなり、皺ができ、皮膚も固くなる。その変貌の様ははげしく、鏡に写る自分の顔を判別することさえままならない。自分自身が重荷となり、七十歳を越えると周りの人へも迷惑をかける。ダヴィデが言うように、「あるのは悲しみだけ」、彼らは生きているのではなく、生きながらえているだけである。健康であれば、病を恐れ、病であれば、命を倦む。「ただ生きていても、健康でなければ意味がない」。欠乏状態をかこつ人もいれば、隷属状態に不平をたれる人もいる。他人には言えない不治の病を嘆く人もいる。不満の種はさまざまあって、身体の奇形、損失、危険、友人との死別、難破、迫害、投獄、不名誉、敗北、無礼、中傷、悪口、怪我、軽蔑、不遜、不親切、嘲り、侮辱、不幸せな結婚、独身生活、子だくさん、子宝に恵まれないこと、召使の悪事、子供の不幸、不毛、追放、圧制、挫折、不遇などなど。

この種類はあまりにも多く、ここまで話すと、  
おしゃべりなファビウスでさえうんざりする。——

これは何巻もかけて語るべき主題であって、その幾つかについては、しかるべきときに別の箇所を詳述することにする。当面は以下のごとく言っておけば事足りるであろう。不満は人の魂を苛み、身体を細らせ、乾燥させ、萎ませ、古くなったりリンゴのようにしなびさせ、骸骨のようにしてしまう（「心配事でやせ衰え、骨と皮だけになる」）。「時は厄介で陰気」、「報われぬ日々」が、ゆっくり、鈍く、重々しく続くので、我々は吠え、うなり声を上げて、ケベースの表の「悲しみ」と同じく、髪の毛をかきむしり、魂の苦痛のためにうめく。『詩篇』（40. 12）でダヴィデの心が「数え切れないほどの厄介ごとのために彼を押しつぶした」ように、我々の心は我々を挫く。よって我々はすすんで、『イザヤ書』（38. 17）のヒゼキヤとともに「見よ、幸せのために、私は苦しんだ」と告白し、ヘラクリトスとともに泣き、エレミヤとともに出生の日を（20. 14）、そしてヨブとともに星辰を呪う。またシレヌスの格言を信じて、「生まれないのにこしたことはないが、生まれたのなら早く死ぬにこしたことはない」と思い、生きていかねばならないのだとしたら、ティモンのように世を捨て、わが国の隠者のように洞窟や洞穴に這いずり込み、犬儒派のクラテス・テバヌスのように全財産を海に捨てる。あるいはアンブラキアの哲学者クレオンプロトスのように、この世の悲惨から逃れるために、四百人の弟子とともに、崖から海に身投げする。

\*太字表記は原文がラテン語もしくはギリシア語であることを示す。

テキスト

（底本）Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).

Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy* (Facsimile) (*The English Experience*). Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbrook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

既訳

「第1部第1章第1節」	『京都府立大学学術報告 人文・社会』	第59号	2007	所収
「第1部第1章第2, 3節」	『京都府立大学学術報告 人文・社会』	第60号	2008	所収
「第1部第2章第1節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第61号	2009	所収
「第1部第2章第2節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第62号	2010	所収

(2011年10月3日受理)

(おかむら まきこ 文学部特任教授)

(かわしま のぶひろ 大阪学院大学准教授)